発表 No.実２　　**実践発表**

生活･学習のための４技能の総合的教材の開発とその活用
―子どもが進んで取り組む日本語学習を目指して―

百瀬千里・加藤美乃里 1)（松本市子ども日本語教育センター）

１．実践の場の特徴

長野県松本市の小中学校に在籍する日本語指導が必要な児童生徒数は、コロナ禍をはさんで40~60 名を推移している。在籍は１校に多くて 5,6 人で、１人という学校も多い。散在地域のため専任教員を配置できる学校は少数で、他は外部支援者が日本語指導を担っている。松本市子ども日本語教育センターは松本市教育委員会の委託を受け、市内小中学校に日本語教育支援員を派遣、市教委・学校との連携のもと日本語支援を行っている。

２．実践の背景と目的

これまで「おしゃべりができるようになっても読み書きを嫌がる。」「学校文化を知らないため、学習の前にまず学校生活の適応に時間がかかる。」という子どもたちの姿を多く見てきた。読み書きの力は学習参加のためには不可欠であり、子どもが不安なく学校生活を送れることは、学習意欲を持つことにつながる。また、散在地域では日本語の支援だけでなく学校生活全般のサポートをする体制が不十分であり子どもやその家庭だけでなく、受け入れる学校側にも困り感が強い。このような現状を目の当たりにしていくうちに、言葉の支援だけでなく学校適応も視野に入れた日本語指導の必要性を感じ、教材『学校生活のためのにほんご　やまのぼり』（以下『やまのぼり』）を作成し、実践にあたってきた。

『やまのぼり』は、日々の学校生活で誰もが必ず経験するであろう場面をイラストと会話を含む文章で提示し、文型、読み書きを無理なく学べるよう工夫した。

３．実践の内容・実践例

3.1. 実践例１　読み書きのハードルを下げる

2021 年 1 月から 3 月、4、5、6 学年 3 名のグループ指導において、本文の登場人物を役割分担して音読した。学校生活ですぐに使えるフレーズがたくさん出てきたり、分担して読む負担を軽減したことで、もう１回読みたいと進んで読むようになった。誰のセリフか、会話文と地の文との区別を読み取れるようになった。学習した文型で書かれたまとまりのある文章を読むことで無理なく内容も理解できた。

また年少者の学習者には、おしゃべりはできるが作文を書くと表記の間違いや助詞が抜けたりするケースがある。『やまのぼり』の各課には必ず語の並び替え問題があるが、それは助詞の存在や機能に意識を向けさせるための仕掛けである。子どもたちは語句が書かれた付箋をゲーム感覚で並び替えるなど、楽しみながら問題に取り組んだ。その結果、助詞に意識が向き、話し言葉と書き言葉の違いを視覚的にも学ぶことができた。

3.2.　実践例２　行事に不安なく参加するために

2023 年 6 月キャンプ・運動会、7 月プール教室、11 月音楽会・マラソン大会、2024 年 1 月

スキー、スケート教室のお便り配布後、3 学年 2 名、５学年 1 名の児童の取り出し授業にて、1 対１の対面授業で実施した。

行事のときに集合時間を間違える、忘れ物をするといったことで皆と同じように行事に参加できず子どもが困ったり、お便りを渡して説明をしてもうまく伝わらず担任教師も困惑するといったケースがある。そこで行事前に『やまのぼり』のやさしい日本語で書かれたお便り例で、情報の読み取りポイントを確認した上で、行事前に実際に学校で配布されたお便りを一緒に読み、日程や持ち物の項目が大切なポイントであることを示した。持ち物はイラストで示したり実物を見せた。行事前のお便りを読むポイントがわかってくると、持ち物は何か、集合時間は何時かなどを気に掛け自主的に質問するようになったり、気を付けるポイントがわかり安心して行事に参加できるようになった。教師側も子どもが何で困っているのかに意識が向くようになった。

４．結果と考察

4.1.子どもたちの姿の変容

実践開始時、読み書きを嫌がっていた児童が、1 行、1 段落、まとまった文章へと段階を踏んで読んだり書いたりできるようになり読み書きに抵抗を示すことが少なくなった。

4.2.支援員の意識の変化

文型だけを教え込むのではなく、子どもにとって今どんな言葉が必要かという必要性に目が向くようになり、よりその子に合った授業スタイルの構築を考えるようになった。

4.3.学校教員意識の変化

「日本語が母語でない子どもに必要な配慮とは何か」について、子どもを見る視点を支援員と共有して原学級での配慮の仕方など工夫を始めている。

4.4.今後の課題

２．で述べた課題解決を目的に『やまのぼり』を作成、使用した結果、子ども、支援員、学校の三者に 4.1～3 のような変化が見られた。

今回の実践では、来日直後から初期指導終了段階までの児童・生徒へのテキストの活用であり、日本生育の児童や学び直し日本語など日本語の課題が様々な児童・生徒へこの教材をいかに活用できるかまだ実践例が少ないので今後実践を重ね検証していきたい。また１，２で述べている散在地域であるがゆえの課題を解決するためにも、教材活用の実践例を積み重ね、指導者個々が研鑽を積むとともに、子どもと同様に散在する指導者（教員や外部支援者）のつながり、情報共有、周囲への発信の場を作っていきたい。

・・・

付記

１)共同実践者　栗林 恭子・西尾 淳

【引用文献】

加藤 美乃里・百瀬 千里・西尾 淳・栗林 恭子(2023)『 学校生活のための日本語　やまのぼり』学事出版